[巻頭言]

「安心」社会から「信頼」社会へ

佐々木篤信

この１年も目まぐるしく過ぎ去った。昨年度は、センター主催のオープンセミナーを企画し地域への働きかけに意識的に取り組むことで、それなりの反応と成果とを得ることができた。今年度は、外向けの事業というより学内あるいは当センター構成員自身による研究発表・議論に焦点を絞った企画が実行され、新たな方向と可能性を探ることになった。当センターの地に足をつけた新たな取り組みが、その第一歩を踏み出した、といえる。今後更に、異なる専門担当者集団としての当センターの特性を生かし、特色ある教育と研究及び地域貢献のあり方を探りつつ確かな成果を示していく必要がある。こうした当センターの今後のあり方を考える上で参考となる、近年の興味深いテーマについて考えてみたい。

標記の『安心社会から信頼社会へ』（山岸俊男著、中央公論新社、１９９９年）がそれである。これは日本型の「安心社会」から、新たな開かれた「信頼社会」構築に向けた「斬新な日本文化論」とされている。当センターのメンバーも、この時代、社会と文化、生命の営みの流れを意識しつつ、それぞれの異なる専門領域で課題解明の方向を探ろうと努力してきた。激しい時代の移り変わり、地球規模での微妙な自然界の均衡破壊、これと結びついた意識、文化、精神、社会のもう一つの環境が抱える病理、その行く末に関する一層深刻な兆候を、その肥大化する情報の中に読みとることができる。生命の存続を脅かすどのような現実が進行し、それがどこに行き着くのか、これに伴い求められる新たな選択基準や計画性・自己規制について、今や地球上のどこに住んでいようと無関心ではいられない。

日本の大学自体が世界と国のこうした動きにさらされ、今大きな転機に立たされている。今後どのような方向に向かおうとしているのか、この研究・教育機関がどのような新たな機能を現実社会で果たすよう求められているのか。その不確実な状況にとまどいを感じながらも、その現実を自らの課題として視野に入れざるを得ない。『不確実性の時代』という著書がジョン・Ｋ・ガルブレイスによって書かれ、翌年日本で翻訳され紹介されたのは１９７８年であった。その後の２０年余の年月は、一段と大きくなる不確実性の時代状況の中に新たな生き残りの道を探ろうとする人類の挑戦と苦悩の時代として後世から振り返られることになるかもしれない。当センターを含む大学自体もその例外ではあり得ない。

しかし本来、より高度な存在としての地球上の生命体は、この不確実性に道を切り開く営みを意識を介せずに行ってきていた。この点に関する新たな知識と情報を、この生命体の一部としての人間の思考力が把握しつつある。それはあくまでも事後的に、自然界が編み出し実際に生き延びてきた経過と仕組み、驚くほどの内部機構と仕掛けを人間の意識が追体験、再構成しつつあるということである。何億年の時間をかけて、地球上の生命がどのようにしてその不確実な環境を制御し、その環境を取り込み生き延びる新たな仕組みを自己の内部に生み出してきていたのかが理解されてきた。意識する生命体としての人類は、自らの加速化し巨大化する環境負荷と生存そのものを危険にさらす破壊的影響力を地球規模で引き起こしつつあ

るか、その責任を意識せざるを得なくなっている。

飽くことなき欲望の担い手である個人が、その生命を支える内外の環境を最も効果的に安定した状況で維持するために今何が求められているのか。そこにどのような個人間の関係、共同の価値、共有される新たな仕組みを生み出していくのかが問われている。現実社会で今最も強く求められているのが、この生命体の原初的仕組みの意識的取り込みと実現であり、状況に応じた創造的な参加のシステムである。構成員がこの目的に添って最も大きな力を発揮する前提は、個人の今ある現実と可能性とを全体として受け入れることの表明である。その構成員間の「信頼」は、この不確実性を乗り越える重要な鍵であり、条件となる。危機を乗り越える最も効果的な新たなエネルギーがここから「生まれる」。「仲間うちを超えた他者一般への信頼」の関係は、相互の交流とコミュニケーション過程を介し、単なる「適応」を超えた取り組みとして実現されていく必要がある。

(文化研究センター長)